

日本人就学前幼児の教室と家庭における 英語学習に関する事例研究

Case Studies of Japanese Preschoolers Learning English In a Classroom and At Home

豊田ひろ子

Hiroko TOYODA

東京工科大学

Tokyo University of Technology

Abstract

Case studies were carried out on Japanese preschoolers learning English as a foreign language and differences between a group learning English from a professional English teacher in a classroom and a group studying English with parental support at home were investigated. It was found that classroom learning can provide experiences with English such as acting out plays in a group, while home learning allows children to study English through multimedia materials. In both settings, the children who were interested in English and on good terms with their facilitators were the most successful learners.

Keywords

EFL, Japanese Preschoolers, Individual Differences

1. はじめに

最近、日本では英語学習の低年齢化が進み、小学校に上がる前の幼児が、英語教室に通ったり、自宅で英語を学習したりしている。親子で英語圏に短期留学することもある。幼い子どもたちは、英語学習にどのように取り組んでいるのか。株式会社ベネッセコーポレーションは、就学前幼児英語学習者に向けて、「ベネッセこども英語教室」の開講と、家庭用教材「こどもちゃれんじ English」による通信教育などを行っている。今回、「ベネッセこども英語教室」で、また「こどもちゃれんじ English」の教材を使って、英語を学ぶ子どもたちの様子を撮影したビデオを視聴し、観察による事例研究を行った。教室と家庭というそれぞれの環境における英語教育の工夫、子どもたちの英語学習の特徴、英語学習を成功させる要因と指導側の課題について考察した。

2. 英語教育の工夫

2.1 教室と家庭における英語教育の比較

就学前幼児向けの「ベネッセこども英語教室」と家庭用通信教材「こどもちゃれんじ English」による英語教育を比較すると、図1に示される違いがある。

	教室における英語教育 ベネッセこども英語教室	家庭における英語教育 こどもちゃれんじ English
学習形態	集団学習(週1回50分)	個人学習(日常生活の中で適宜・ 通信教材は隔月ごとに配送される)
支援者	英語の教師(日本人)	保護者
使用言語	英語	英語と日本語
教育的 特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の読み聞かせと、お話に関連した英語活動(ゲーム, 歌, 紙工作, ごっこ遊びなど) ・英語の先生の声掛けによる自然な英語体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・マルチメディア教材による自律学習 ・家族(保護者や兄弟姉妹)との英語遊びによる自然な英語体験
教材	生徒用: DVD, CD, 絵本, ワークブック 教師用: 絵本, CD, カード教材, ポスター教材, クラフト教材, ワークブック	DVD, 音声玩具教材, ワークブック, 紙付録, 保護者向け冊子

図1 教室と家庭における英語教育の違い

教室では、集団学習の形態で英語の先生による英語指導が少人数の生徒に対して行われている。「ベネッセこども英語教室」では、授業中に先生が使用する言語は英語のみで、「絵本の読み聞かせ」を中心に据えて英語活動が行われている。毎月異なる絵本のお話(内容は、新しいお友だち, 水泳, 宝探しなど)の教材に取り組む。子どもたちは、自宅で動画化されたお話を DVD で見たり, CD で聞いたりすることができる。授業は毎回, ごあいさつの歌で始まり, 絵本の活動に入る。先生は, まず絵本の表紙を見せて, お話が登場するキャラクターなどに関して, 子どもたちと英語で会話のやりとりをする。次に, お話が収録された CD でお話を聞かせる。CD で聞くお話には声優が演じるキャラクターの音声と効果音が付いている。CD を聞き終わると, 先生自身が読み聞かせをする。先生は, お話の内容を子どもが理解しやすいように, CD を聞くときは, 絵を指差し, ジェスチャーをする。読み聞かせをするときは, さらに, 自分の声色や表情を変えるなどして工夫をしている。読み聞かせが終わると, 毎回, お話に出てきた英単語を使ったゲームなどで楽しく練習する。さらに, 毎月, レッスンが進むごとに, 絵本の内容に関連した様々な英語活動が行われる。具体的には, 歌の活動(お話の内容に関連した英語の歌を習う), クラフト作り(お話に出てくる小物, 例えば, 魔法のゴーグルや杖などを紙で作る), 最後は, 習った歌と作った小物を使って, ごっこ遊びの活動をする。ごっこ遊びは絵本の内容に基づいたもので, 歌や台詞, 効果音が録音されている専用の CD を使って行う。授業の最後は毎回, ワークブックのチェック, ご褒美のシール貼り, 表現の書いてあるポスターを使っての英会話表現の学習, ABC の歌がある。宿題はワークブックの文字学習などが出されている。

一方, 家庭学習は個人学習の形態で, 子どもが自ら英語学習に取り組み保護者が支援して行われている。「こどもちゃれんじ English」の場合, 隔月ごとに異なるテーマ(果物, 動物など)で, DVD, 音声玩具, ワークブック, その他付録など, マルチメディア教材の

パッケージが自宅に配送される。開封時、幼い子どもたちは、たいてい音声玩具に興味を示す。まず DVD を視聴する。保護者の膝の上にちょこんと座り見ていることが多い。DVD を BGM のようにかけて、ワークブックに取り組む親子もいる。DVD には、英語と日本語を話す先生役のお姉さんやお兄さんと、人気者のキャラクターたちが現れる。子どもは、お話、歌、リミック・ダンス、発音などのコーナーを見て英語学習をする。保護者は、時々英語を繰り返して子どもに聞かせ、英語の意味を教えて支援する。DVD で「一緒にやってみよう」「一緒に言ってみよう」など誘い掛けの声があると、子どもは、歌ったり、踊ったり、発音したりする。保護者に「やってみたら？」と促されてする場合もあるが、声掛けがなくても、子どもは好きなものは積極的に行う。DVD には音声玩具教材の使い方を説明するコーナーがある。これを見ながら、子どもは、音声玩具教材を使ってみる。DVD を視聴した後は、音声玩具教材やワークブックで英語学習に取り組む。音声玩具教材には、小物をかざすと英語が聞けるもの、辞書機能があるもの、自分の声を録音できるものなどがあり、子どもがひとりでも簡単に操作できるように工夫されている。ワークブックや絵本による英語学習は、保護者に助けをもらいながら行う。付録によっては、家族ぐるみで英語の遊びをすることもある。

2.2 英語教室の良さ

英語教室の良さは、まず、子どもが英語指導のプロである先生から英語を直接学べることだろう。幼少の子どもにとって、人から習うことは、自分の五感を生かせることを意味する。特に言葉は、人と人をつなぐ架け橋である。子どもは、英語の先生との英語のやりとりの中で、自分と人が英語でつながることを体感する。「ベネッセこども英語教室」の先生は、日本語を母語とし、英語にも堪能な子育て経験のある女性を中心である。子どもが日本語でつぶやくと、何を言ったかわかるので、英語学習を助け英語力を育てる上で最適な英語の声掛けをする。就学前幼児を教える先生は、子どもの保育の知識と経験に基づいて子どもを見守り、学習に落ち着いて取り組めるように、忍耐強く指導する。教室で教えるためのクラス運営の技能もある。子どもひとりひとりに、平等に英語で声を掛け、発話を促す、褒めるなどの配慮を怠らない。子どもたちの学習者としての個人差を掌握し、各自の発達を促すと共に、ひとつの集団の中で活動できるように統率する。子どもたちは、先生を信頼し学習を進める。最初の頃はまとまりがなくても、子どもたちは徐々に力を合わせるようになってゆく。

英語教室は、英語の自然な言語体験ができることにも良さがある。生活に英語が使われていない日本だが、教室では、英語の先生が、英語で声掛けをしてくれるので、子どもたちは経験的な英語学習をすることができる。例えば、毎回ワークブックやシールを渡されるたびに、「Here you are.」という先生の声掛けを聞き、「Thank you.」と言うように促されていると、子どもたちは「Thank you.」と言えるようになる。次第に、何かをもらうときは、自然と「Thank you.」と言えるようになる。また、先生に質問されるたびに「OK.」と答えることを習っていると、同じような状況で返事ができるようになる。このように、特定の場面で、先生との間で頻繁にやりとりされていた英会話表現を、その場で教えてもらうことによって、子どもたちは、個人差に関係なく習得していた。また、「ベネッセこども英語教室」では、絵

本のお話を子どもたちに学習させた後、その内容に基づいたごっこ遊びによって英語体験をさせる教育を行っている。それは、ごっこ遊びという手法を使って、より多くのそしてより複雑な英語を体験させようとする努力のひとつの表れと考えられる。実際にビデオに録画された授業の様子を観察すると、子どもたちは、そのような英語体験を皆で楽しみ、英語の歌を歌い、特定の場面で英語を発声することがあった。そのような効果を生み出すために、子どもがお話の内容を十分理解した上でごっこ遊びを行えるように、指導計画が綿密に工夫されていた。

例えば、魔法のゴーグルのおかげで、泳げない子どもが泳ぎを楽しんだというお話の場合は、毎回お話の読み聞かせがあったが、最初の2レッスンで、まず、ごっこ遊びで使う英単語や歌の学習があった。1回目のレッスンで、子どもたちはゴーグルを紙で作し、お芝居のときに、頭にはめて使った。先生が‘Tear it.’ ‘Glue it.’ ‘Tape it.’ など英語で指示を与え、子どもたちは作業しながら、自然な英語体験をしていた。月後半の2,3回目のレッスンで、ごっこ遊びが行われた。先生が子どもたちを引率し、プールに泳ぎに出掛けるという設定だった。まず予行練習が行われ、次に歌が録音されたCDをかけてごっこ遊びが行われた。予行練習のときは、何をしているのかあまり意識がなかった子どもたちも、CDがかかると一斉に集中した。子どもたちは、自分の魔法のゴーグルを紙袋に入れて、先生を先頭に出発する。途中、海の生き物を見かける。お話で生き物の英語は覚えている。CDに合わせて英単語を言う。あらかじめ、教室の床の一角を色テープで囲って設けておいたプールが見えてくる。子どもたちは、ゴーグルをつけ、飛び込み、泳ぐ真似をする。‘Swim, swim.’ と言いながら、思いのままに泳ぎ回る。床にお腹を付けて水をかく子どももいれば、立ち上がって大きく泳ぎ回ったりする子どももいる。先生がサメになって追いかけると、はしゃいで逃げ回る。英語の発声には個人差があったが、皆、大興奮だった。家に帰ってからも、子どもがゴーグルをつけていたという保護者からのコメントがあった。印象深い体験は、集団だからこそ味わえるものなのかもしれない。

また、宝の地図を使って、魔法の杖を持って宝箱を見つけに行くお話は、先生が子どもたちと一緒に宝探しに行くというものだった。子どもたちは、紙製の魔法の杖を持ち、宝探しに出掛ける。途中、絵本に出てきたような森の中を歩くことになり、怖さを吹き飛ばすために、本の主人公がロズさんだ英語の歌‘Let’s walk!’を歌う。床に貼られた紙の石を踏み外さないように注意して川を渡り、壁に貼られた紙の木をよじ登り、宝箱を見つける。魔法の杖をかざしながら呪文を唱えると、宝箱が開き、アルファベットが書かれた卵を見つける。先生が卵を‘Here you are.’と配ると、子どもたちは‘Thank you.’と受け取り、手の平にのせるしぐさをする。皆で‘Yummy, yummy.’と言いながら、思い思いの表情でおいしそうに食べる真似をする。魔法の呪文を唱えるときは、どの子どもも真剣な顔つきだった。「ごっこ遊び」が好きな年齢とはいえ、子どもたちの想像力には驚かされる。

このように、英語教室では、子どもたちが、英語を習い始めたばかりでも、覚えた英語を使って言語体験ができるように、教育的な工夫がされており魅力的である。しかし、その成果のためには、英語の先生の研修や効果的な教材の開発は必要不可欠であることは言うまでもない。

2.3 家庭用通信教材の良さ

家庭用通信教材の良さは、子どもが自律的に英語学習に取り組めることだろう。他の子どもの存在を気にすることなく、自分の都合の良いときに、DVDや音声玩具教材を使って、自分の発達段階に合った内容の英語を何度も聞いて、英語を学習することができる。DVDや音声教材は、人と違って疲れを知らない。教材は基本的に英語で作られているが、子どもが無理なく取り組めるように、作業に関する指示は日本語で与えられている。辞書型の音声玩具教材は、キー押しや、ペンタッチなど簡単な操作をするだけで、絵で示された英語の単語や歌を即座に聞けるようになっている。新しい教材の使い方のデモンストレーションはDVDを見て知ることができる。子どもは、英語ネイティブ話者の発音を何度も聞いて英語を覚えるので、英単語の発音を聞き分ける耳が育ち、自分自身の発音もネイティブライクになる。聞き慣れてくると、保護者と教材の英語の発音の違いを指摘するほどである。継続的に教材を活用していれば、英単語数も着実に伸びてゆく。

家庭学習には、マルチメディア教材を使って英語を学べることもある。通信によって教材を受け取るユーザーの幅広い特性やニーズに配慮し、教材には、DVD、音声玩具、ワークブック、その他付録など、多種多様なメディアが含まれている。そして、英語の学習項目が、それぞれのメディアの利点を生かして、メディア間で連動する形で盛り込まれている。子どもは、自分のニーズや好みに合ったメディアを使って英語学習を進められるようになっており、英語を異なるメディアを使って複数の場面で学習することによって、英語が覚えやすくなるように工夫がされている。例えば、DVDは映像と音声によって、お話、数字、数や形といった知育系の内容を、子どもに理解しやすいように伝えることができる。

しかし、DVDは一方的に進行するメディアであるために、子どもの英語の理解を確認し、子どもに英語をアウトプットさせることが難しい。そこで、ワークブックという別のメディアで、子どもに自分のペースで英語学習に取り組めるようにしている。ワークブックには、DVDの内容が載っている。保護者に助けをもらい、子どもは、自分のペースでシール貼りや紙めくりなど手先を動かしながら学習に取り組む。ワークブックは、辞書機能が付いた音声玩具教材と連動しているので、子ども自身が英語を確認することができる。年長者向けのレベルになると、ワークブックは、絵本と文字学習用のブックに分けられ、それぞれの領域の英語学習により深く取り組む。

保護者は英語の発音が苦手でも安心して見守れるが、「これは何?」「英語は?」「さっきDVDに出てきていたね。」と子どもに声を掛けることは、子どもの理解を助けるので効果的である。保護者は英語の先生ではないが、子どもの反応を見て、意味や英語の発音を教えることはできる。先生以上に、子どものことを掌握しているので、例えば‘airplane’を教えるときに、「この間乗ったね。」などと、子どもが覚えやすくなるヒントを与えることができる。子どもは、保護者に褒められると喜び、英語学習の意欲が高まる。

進歩が著しいメディアを子どもの英語学習に活用する「こどもちゃれんじ English」だが、新しいメディアが台頭する中であっても「子どもの英語学習者としての目線」は大事にしている。例えば、今年度、年少者向けの教材のリニューアルで「冒険物のお話」を制作し、DVDとワークブックに連動する形で収録した。この「お話」の主人公は、日本語を母語とする人気キャラクターのしまじろうである。しまじろうは、船に乗り旅をする英語を話す仲間

に出会い、ロボット島、人魚島、ジャングル島などに、一緒に旅に出掛ける。しまじろうは、行く先々で、状況をよく観察し、仲間が使っている英語を自ら習い、困難を乗り越えてゆく。「英語ではこう言えばいいんだね。」と判断しながら、しまじろうが英語を習う姿を見せて、子どもに、しまじろうと一緒に考えさせ、英語を学ばせている。つまり、英語を教え込むのではなく、子どもが自律的に英語を学ぶように促している。また、「お話」という文脈のある英語の中で、単語や会話表現を習わせることによって、子どもが英語を思い出し、また記憶できるように工夫している。学習の様子が録画されたビデオを観察すると、特に困難を乗り越えるときの決め台詞(例えば、‘I’m Shimajiro.’や‘Here you are.’など)を、気持ちを込めて発声する子どもたちの姿があった。効果の表れと思える。他には、2013年度、年長者向けのラインでは、DVDのリモコンを使い、英語ネイティブのお兄さんたちと擬似英会話体験をするコーナーのリニューアルも行われた。質問に対して応答を選択すると、ドラマのように演出された結果を視聴することができる仕掛けとなっていた。子どもたちはリモコンを操作するこの活動を楽しんでいたが、子どもの目線で脚本が書かれていたことが、楽しさの効果を生んだものと考えられる。

家庭における英語学習では、子どもたちが、自律的に個人学習を進め、英語を聞く力や英語を発声する力が身に付くように、多様なメディアを活用した教育的な工夫が施されており魅力的である。その効果のためには、英語学習者としての子どもの目線に配慮した教材のコンテンツ開発、子どもに優しいメディア技術の応用に挑戦し続けなければならない。

3. 英語学習が成功する要因

3.1 就学前幼児の英語学習者に関する社会心理学的モデル

第二言語習得の成功を個人差と環境のポジティブな相互作用によるものだと捉え、Gardner (1985) は社会心理学的モデルを提示した。事例調査の観察に基づき、このモデルを就学前幼児の英語学習者たちに応用して、図2のようなモデルを試作した。

モデルには、英語学習の成功に関係すると思われる4つの要因がある。1つ目の要因は、日本における英語教育の方針が関係する「社会的背景」である。2つ目の要因として、「不安・集中力」「動機・態度・対人意識」「言語適正・日本語力」「知性・関心」から成る「個人差」を挙げた。前者の2つの要素は子どもの学習者としての心理発達に関係しており、後者の2つの要素は英語学習者としての認知発達に関係している。「個人差」は学習の原動力となっていると考えられる。その個人差が相互作用を起こす対象が3つ目の要因である「環境」である。「環境」には、今回調査した「教室」、「家庭」の他に「海外」があると考えた。4つ目の要因の「結果」は「個人差」に影響を与える働きがある。「英語力」、「異文化理解力」、「コミュニケーション力」を挙げた。4つの要因の中でも、「個人差」と「環境」のうち「教室」と「家庭」の間の相互作用に焦点を当て、英語学習の成功をもたらす要素について考察した。

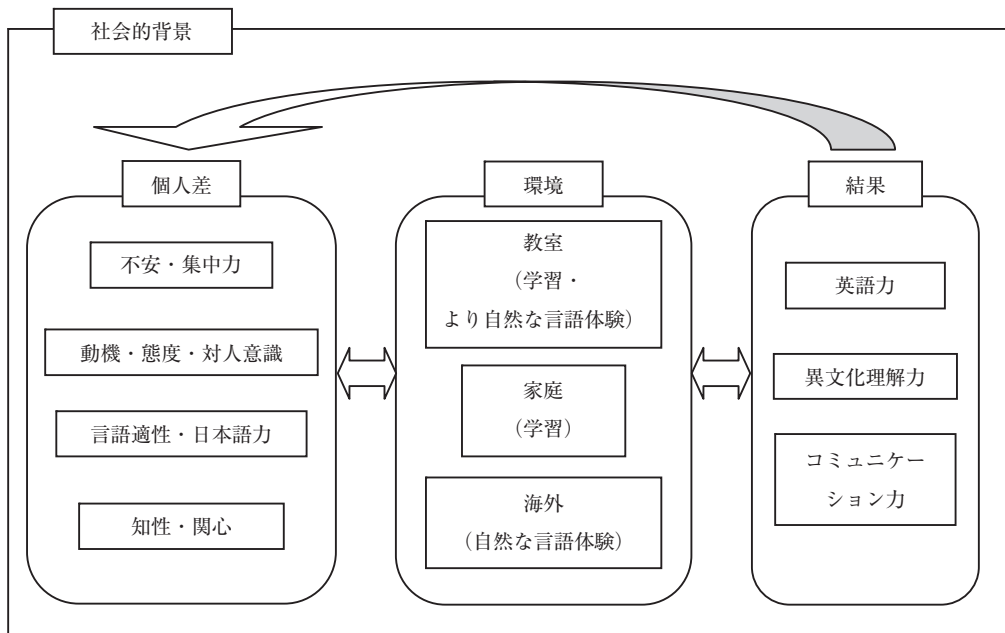


図2 就学前幼児の英語学習者に関する社会心理学的モデル

3.2 教室で英語学習を成功させるには

教室は、子どもたちが本などの教材を使って英語学習ができる環境であるだけでなく、英語の先生に英語で話しかけてもらって、より自然な英語体験ができる環境でもある。つまり、英語の知識だけでなく、英語を運用する能力を身に付けることができる場所だと言える。また、集団で英語活動を行うので、対人的なコミュニケーション能力が育つ可能性がある。さらに、外国に関するコンテンツや外国出身あるいは外国に滞在したことのある先生と接触できれば、異文化を理解する態度が育まれる。それでは、そのような結果を享受できる子どもにはどのような個人的特性があるのだろうか。事例調査で子どもたちの様子を観察すると、学習に意欲的に取り組んでいた子どもには、次のような傾向が見られた。

- 1) 集団学習ができる。親から離れても不安がない。先生の指示に従って行動できる。英語活動に集中できる。活動の途中で歩き回らない。
- 2) 英語教室を楽しみにしている。新しいことに挑戦しようとする前向きな態度がある。先生が好き。クラスメートと仲良くできる。
- 3) 自分の気持ちや考えを日本語で簡潔に表現することができる。困ったときも日本語で助けを求められる。日本語のおしゃべりから頭を切り替えて英語学習に戻れる。
- 4) 英語に興味がある。英語を聞いて真似ることができる。予習をしている。
- 5) 知的な関心がある。ゲームや工作など頭を使う活動が好き。

集団学習ができるのは年少者よりも年中者だった。年少者の中には、体力がないためか眠ってしまう子、活動以外のこと(教室の外の景色など)が気になり集中できない子がいた。

また、日本語のおしゃべりが止まらなくなる子もいた。年少者と年中者では1年しか年齢的に差がないのだが、集団学習への適応に大きな差が感じられた。また、女の子たちの方が、男の子たちよりも、歌やダンスが得意な様子だった。歌には、地声と裏声が必要だが、男の子は裏声を出しにくいのかもしれない。踊りも、ヒーローポーズはするがそれ以外はしない男の子がいた。授業の多様な英語のコミュニケーション活動に特に積極的に関わっていたのは、英語に興味があり英語学習に集中できている子どもたちだった。英語の発声が多かったのは、膝に乗って甘えてしまうほど先生が好きで、予習をしており、CDよりも英語を早く言えて、先生の英語も丸ごと聞いて真似できる年中者の女の子だった。

指導の面の課題としては、先生の褒め方があるように思った。先生は子どもが英語の質問に反応すると褒めていた。頷いているだけでも、文で答えるべきところを単語で答えているだけでも、褒めていた。コミュニケーション力の育成からすれば、反応に対して褒めても問題は無いが、英語力の育成からすると褒めすぎかもしれない。コミュニケーション・アプローチという指導法から生じる問題であるが、子どもの英語そのものに焦点を当てて褒め言葉を微妙に調整して、より適切なフィードバックを与えるなどの工夫が必要だろう。また、カリキュラム的に、英単語や英会話表現に比べて英文法の指導が弱いように思った。子どもに内容を理解させるために使用する文法情報を限定するため、自然な英語環境でネイティブの子どもであれば普通に触れているような文法情報が減少する傾向があるようだ。これもコミュニケーション・アプローチという指導法に関係する問題であるが、英文法に関する指導も体系化を図るべきだろう。

3.3 家庭で英語学習を成功させるには

子どもが教材を使って、家庭で英語の勉強をする場合、その子どもは自然な英語体験よりも、英語学習そのものに取り組むことになる。そのため、英語の運用力よりも、英語の知識の定着が促進される。また、DVDを視聴し、英語でコミュニケーションしている人々を観察することによって、英会話や英語を学んだり、保護者が相手になってくれれば、対人的な英語のコミュニケーションを練習することもできる。外国に関する情報がDVDやワークブックに収録されていれば、異文化を知ることができるし、保護者と話すことによって、日本の文化と外国の文化の違いを認識することもできる。このような家庭での英語学習に成功する子どもの特性を観察すると、次のような傾向があることがわかった。

- 1) 英語学習に集中して取り組むことができる。おやつや、おもちゃに気を取られない。活動の途中で歩き回らない。
- 2) 英語教材を楽しみにしている。新しいことに前向きな態度で挑戦する。英語教材に現れる登場人物が好き。
- 3) 保護者や兄、姉が支援してくれる。子どもと家族の間に信頼関係がある。保護者が英語学習は役に立つ、良いことだと思っている。
- 4) 英語が好き。英語を聞いて真似ることができる。
- 5) 英語の勉強が好き。英語学習の内容に関して、簡潔に日本語で考えを述べるができる。英語ができるようになると達成感を抱く。

子どもたちは、年齢が上がるごとに、家庭での英語学習に集中して取り組んでいた。家に教材が届くとうれしそうに開封する。居心地の良い自宅でリラックスして学習に取り組んでいた。しかし、疲れているときや、空腹時は、集中力が続かないようだった。子どもたちは自立的に学習に取り組んでいたが、保護者や兄、姉など、家族の支援があった方が、楽しく順調に学習できていた。年少者でも、保護者が傍で助けてあげると、即座に辞書型音声玩具の使い方を覚えた。おもちゃがたくさんある家の子どもは、玩具教材が好きだったが、使いこなすには英語力が必要だった。

家族ぐるみで行う英語活動を、子どもたちは喜んで行っていた。特に、大型シートを使った Touch and Step ゲームやかるた取りは人気があった。家族と一緒に楽しそうに英語の歌を歌って踊っていた。年長者には、子どもが、リモコンを操作して DVD の画面に現れるネイティブと英会話の練習をする活動や、バーチャル・マスコットのお世話を英語とする活動が設けられ、子どもたちはうれしそうに取り組んでいた。自然な英語体験ができるこのような活動は、英語学習の意欲を高めてくれるので、今後も教材に組み込むべきである。

指導面の課題としては、英語と日本語のバランスの問題があるだろう。事例調査を行った通信教材はバイリンガル教材だった。日本語があると、子どもも保護者も安心して使える様子だった。しかし、2013年度のリニューアルで「お話」を導入し、英語量を増加させたところ、DVD が気に入り何度も視聴していた子どもが、2週間もすると、英語を時々軽くシャドーイングする姿が観察された。英語が口からこぼれる感じだった。英語の発声を促すためには、特定の表現を「せーの」で真似させるよりも、まとまった量の英語を与えて、子どもが好きな英語、言いやすい英語を自由に言わせる方法もある。量だけ増やしても理解できなければ発声はしにくいので、「お話」の形で与えるなど質的な工夫が必要だ。

教室での英語学習同様、英単語や英会話表現の学習は充実していたが、英文法の学習に関してはほとんど触れられていなかった。日本語と重なる部分で英語を与えていれば転移が起ころ効率が良いし、日本語の発達にも支障がないので安心である。しかし、日本語と英語は構造的にかなり異なっている。英語そのものが持つ構造的な特徴も、子どもたちは幼い頃から触れておくべきではないだろうか。幼い子どもは、大人のように説明によってルールを学ぶことは苦手である。十分な英語量に触れながら、潜在的に文法を習えるような教材の開発が待たれる。

4. 結語

今回の事例研究では、日本人就学前幼児の教室における英語学習と自宅における英語学習の様子を観察した。教室は子どもが集団の中でより自然な英語体験ができる環境であり、家庭は子どもがリラックスした状態で英語の勉強に取り組める環境である。2つの環境はこのように相補的であるので、両方を組み合わせると理想的なのかもしれない。それぞれの環境における指導法や教材には、それぞれの良さを生かした教育的な工夫が施されている。子どもの個人差がそれらとポジティブな相互作用を起こすには、いずれの場合も、子ども本人の英語への関心、英語学習に対する意欲、周りの大人との良好な関係といった要素が大きく関係しているようだ。

体操の世界選手権で四連覇を果たした内村航平氏は、インタビューの中で自分の強さの

秘訣について、「(体操の練習を)小さい頃にどれだけやったかということではなくて、どれだけ楽しんだかということだと思います。」と語った。内村氏の言葉は、就学前幼児の英語学習にもあてはまるように思える。英語習得の旅は長い旅である。将来、努力が大きく実を結ぶように、子どもたちが英語学習を楽しんでくれることを願ってやまない。

注

- 1) 事例調査で観察した英語教室は、年少者と年中者(3歳～5歳の子どもたち)が通う2つのクラスだった。1クラスは5名(年少者：男子1名と女子2名，年中者：男子1名と女子1名)，別の1クラスは4名(年少者：男子1名と女子3名)の構成で、週1回50分の授業が行われていた。
- 2) 事例調査で家庭学習を観察した子どもたちは、年少者から年長者の子どもたち(各4名)の12名で男女半数ずつだった。

参考文献

Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.